

まんさく

第305号

社会福祉法人 光寿会
まんさく編集委員会
和賀郡西和賀町湯本30-76-1
TEL 0197-84-2526
題字 元理事長 太田祖電



苑内を『練り歩く盆太鼓』で賑やかに♪

～令和6年9月12日開催～

8月7日に予定していた盆踊りは、感染症対策に臨まなければならず急ぎよ中止。お年寄りの楽しみでもあったため、先日、苑内を盆太鼓が練り歩きました♪ お年寄りたちの喜びように感激のひと時♪

305号『まんさく』もくじ

☆2頁★

*光寿苑敬老会 *寄贈・訪問等
*福祉の魅力を次代に…

☆5頁★

*元気です！家族会♪
*競輪補助事業完了のお知らせ

☆3頁★

*想…災害を捉える

☆6頁★

*「光寿苑の日々」(4コマ漫画)
*「自然法爾」(お寺さんのお話)

☆4頁★

*地域密着型事業紹介

*「おわりに」

光寿苑敬老会 令和6年9月18日

西和賀町長をお迎えし、凛とした姿を見せて下さったお年寄りの皆様。ステキでした♪
 [お祝いの舞台は、10月に改めて催されます。次号でご紹介致しますね(^^♪]



福祉の魅力を次代に… 【令和6年9月27日】

今年もこの仕事の魅力を伝えるため、介護現場の実際のお話を劇にして、9月19日は沢内小学校4～5年生、9月27日は湯田小学校4年生の前で熱演して参りました。光寿会からも2名の職員が馳せ参じまして、精いっぱい伝えて参りました！感じ取ってくれたかな？

[12月には西和賀高校1年生対象に熱演！？予定]



おかげさまでした

寄贈

- ★ 匿名希望様 [盛岡市]
- ☆ 梨子下 深 幸様 [上野々]
- ☆ 高橋 ちづ子様 [下 前]
- ☆ 小田島 智 様 [盛岡市]
- ☆ 下 平 真理子様 [紫波町]
- ☆ 高 田 ユ キ 様 [福島県]
- ☆ 高 橋 智 也 様 [埼玉県]

訪問

- 9月18日「光寿苑敬老会式典参列」
- ★ 西和賀町長、光寿苑家族会会長
- 9月12～20日(計7日)「介護のお手伝い」
- ★ 匿名希望 様 [県内大学生]

面会・外出

- [9月1日～30日]
- 【対面面会】
- ★ 延べ59名 (対象入居者27名)
- ☆ 計6名 (対象入居者2名)
- 【自宅への外出】
- ★ 計9名 ☆ 計2名

- 9月8日「お茶会の運動会」
- ☆ お茶会登録の皆様 … 16名

★=光寿苑 ☆=ひなたぼっこ

光寿会へのご支援

想

災害を捉える 宮城県から発信します⑬

『3.11…そのあと(終)』 白木澤 琴 氏



白木澤琴さん13回目のご執筆です。今回も3.11シリーズではありますが、これが最後のご寄稿となります。噛み締めながら、拝読いたしましょう。

『3.11…そのあと』(最終回)

末期がんの父。余命幾ばくも無いような中、なんと平成29年12月3日、報恩講(親鸞聖人ご命日の仏事)当日の朝を迎えた。

もう、一人では着替えられない状態。横たわる父に法衣を着せ、五条袈裟を数いた車いすに座らせ、最後の着つけ。背もたれを倒すことのできる特殊な車いす(ヘリクライニング型車いす)を用意していただき、男性4人掛かりで段差だらけの廊下を通り、なんとか満堂の本堂にたどり着くことができた。

参詣席の最前列には、緩和ケアの院長先生が待機してくださり、離れた所からケアマネージャーさんや撮影。父のすぐ近くでは、ソーシャルワーカーさんが足をさすってくださり、伯父・母・私が支えた。そして、本来、住職である父が座るべき内陣の場所に、私の夫が初めて報恩講での大役を担うべく着座したのだ。

ご門徒、法中(参拝の僧侶)、家族が見守る中、お勤めが始まる

前に、父から皆様に挨拶を……。しかし、もうほとんど声は聴き取れない。苦しそうにマイクに息を吐く。参詣者からは、

「住職さん、がんばって!」

の声も。その時の挨拶は、私の通訳も交えつつ、やっと周りが聞き取れる状況だった。次のような旨の言葉を残してくれたのだ。

「生きることと死ぬことも同じです。『生死一如』です。」

「これ以上に尊い言葉はありません。『南無阿彌陀仏』(へん死に合掌の形をとっていた)「皆様、ありがとうございました。」

「南無阿彌陀仏」と合掌すると、参詣の方々も自然と合掌してくださり、中には涙を流しながら手を合わせてくださる方も。

私たちにとって、一生涯忘れられない報恩講となった。

父はその4日後の12月7日の朝方、静かに62年の念仏申す人生を終えていった。

かつて金子大栄先生が、「念仏とは娑婆だ。これさえ知っていれば転んだって起きられる」と父に伝えてくださった。また、祖電先生が、「人生は長さが問題ではないのだと教え、念仏申すことの大切さ、苦悩の中で親鸞聖人の教えを聞いていくのだと。そのことがすべて繋がっていく。」

父の死も、病気で動けないから役に立たないとか、人生終わリだということではなく、それでもそこから、その生き様から、多くの人に力を与え、最後の最後まで命輝かせ生きることのできるのだと。

災害をはじめ、病、家庭の問題、仕事の問題、私自身も苦悩は尽きないが、その中において念仏申し上げて生きていくのだと、先人方が命を懸けて教えてくださったように思う。

今日、「まんさく」を縁に、私自身を振り返る機会をくださった宣承様には心より感謝申し上げます。毎回手書きでの温かな清書、本堂にありかとうございました。

完

今月の登録者の方々
17名様です♪

小規模多機能ホーム「ひなたぼっこ」
住宅型有料老人ホーム「湖畔の宿」

朝晩めっきり涼しくなりました。「ひなたぼっこの日常」



【右上】最後の上野マサロン
【左上】ひなたぼっこの日常から
【下3】お茶会：室内運動会



第3回『運営推進会議』(9月24日)

※外部委員10名、職員3名

【職1】8月いっぱいでは

名の職員が退職となったため、新体制で臨んでいます。その影響もあり、長年対応してきた上野々地区サロンへのひなたぼっこ職員の出向は困難となりました。10月からは社協さんに対応を引き継いで頂くことになりました。

【委1】主軸であった職員さんや担っていた仕事等はどのようになり振り替えたのでしょうか？例えばシフト作りとか金銭に関することとか。

【職1】勤務割については以前より別の職員が担当してましたし、金銭のやり取りは新たにSが行い、最終的には本部事務職が対応しています。

【委1】職員減の一方で、利用者増になっている様です。

【職2】急に増えたという

よりも、長い間の関わりの中から利用につながった形です。

【職1】人は「お茶会」

に長年参加されてきた。もう一人はひなたぼっこ通所利用の方で近所のお友達をお誘いして、一緒に曜日に通

われる様になりました。

【委2】地道な努力の成果

が今、出てきてますね。

【委3】お茶会は今後も継続との事で、お茶会に参加している利用者さんからの情報によって新たな利用登録者増につながるのは地道ですが、大きいと思います。

【委2】お茶会には上野々からは勿論、湯川と沢内太田からも参加して下さっています。どの

の地区からも可能です。

【職2】話が交わりますが、夜間防災訓練は10月21日の16時からですので。

第120回



家族会副会長

佐々木忠雄氏

(元消防署員等活躍)

120回目も家族会役員・佐々木忠雄さんの投稿です(^^)
今回も思わず引き込まれてしまう内容ですよ♡

元気です！家族会♪

△ 禿はっば △

小学校で九九を習うのは、一年生位からだっただろうか。学校時代のイベントと言えば、運動会や学習発表会、それに授業参観など色々ある。母は中々学校行事に参加できなかったが、たまたま訪れた授業参観で偉い恥をかかされてしまう！この私の突拍子もない発言で…。

それは算数の授業のこと。授業内容は「九九」の発表だった。先生が、「九九を言える人？」と言うと、「はい！」と言って小さな手が一斉に上がる。私も元氣よく「はい、周りの様子を伺いながらリリッと手を挙げた。九九が分からない訳ではなく、人の前に立つと極度に緊張してしまっているので、なるべく当たりたくなかったのだ。

ある。

元氣に手を挙げた子から順に当てられ、残すは八の段と九の段になった。〃当たりませんように！〃と思いつつ手を挙げる、先生と目が合った！

△ はい忠雄くん、八の段△

と当てられてしまう。覚悟を決めて言い始めると意外と順調に言えた。〃これは大丈夫かも！〃と思った時、〃ハハハ！で見事に詰まる。焦れば焦るほど答えが出てこない。教室はシーンと静まり返る。益々焦ってしまい答えが出てこない。〃もうしている内に近いから小さな声で、〃禿はっば六十四、禿はっば六十四！〃と呪文の様な声で〃同級生が教えようとしてくれた。思わず私は大きな声で、

△ 禿はっば六十四！△

と言ってしまふ。教室は大爆笑！後ろでは腹を抱えて笑っている親たち。〃その中で何とも言えない顔でこちらを見ている母の顔。

家に帰ると母は一枚上の一言！△ 禿はっば六十四は流石に参った(笑)△

KEIRIN

00

競輪補助事業完了のお知らせ

この度、2024年度の競輪の補助を受けて、以下の事業を完了いたしました。

本事業の実施より、ご入居者が安全に安心して入浴できる環境を整備することができました。

記

事業名：2024年度 福祉機器の整備 補助事業

事業の内容：特殊浴槽の整備

補助金額：5,593,000円

実施場所：岩手県和賀郡西和賀町湯本30-76-1

完了年月日：2024年9月3日

社会福祉法人光寿会 理事長 太田 宣承



光寿会の日々 305号◇



イラスト：1000

数名のお年寄りたちと毎朝のようにお会いする訳だが、認知症で何回も新鮮に同じ質問をなさる人はいれば、毎回、新鮮な日常のネタを提供して下さる人も居たり... いずれにしても感じる事は、今日という日は、月日は2度とない場面だと教示してくれている。

吾輩は猫である。名前はまだない。

《夏目漱石》

第104回 丸田善明

自然法爾 (じねんほうに)

文豪・漱石の『吾輩は猫である』も、私は時折開いて読む。よく知られた作品だが、なにが落ちつきの悪さか秘密めく。

この『猫』。漱石自身がパロディにしたと思われる『珍野苦沙弥』という英語教師の家に迷い込んだ、生まれたばかりの子猫の目を通して、人々の日常を描いた作品なのだ。この観察者の『猫』は、名を与えられないまま、三歳にならずに死んだ。なぜ漱石は、この猫に名前を与えなかったのだろうか。

実際に、漱石家の飼った猫はみんな名前がなかった。

かいた言。飼った犬には名が与えられていたから、漱石は猫にはあまり関心がない。かいたという見方もあるが、そうだろうか。

この小説に登場する猫は、みな名前がない。かいたというではない。車屋の猫は『黒』という。二弦琴の師匠の飼った猫は『三毛子』という。『吾輩』だけ、名がないのだ。

思うに、飼った猫であれ、猫はフツと家を出たり帰って来なかったり、家族の中に居ても懐いた目で人を見ない。観察者の目である名は『所有』の証。漱石は、所有できない猫に名は無意味と考えたのだろうか。

おわりに

役目柄、他人の悩みや相談をお聞きする事が多い。私自身も苦悩の渦中でも、大丈夫そう願って聴く場に臨む事だ。ある。また、若き日の私は、良い助言を言えなきや」とか、要するにこういう事です」と要約したり、本当に相手と話したい中味に傾聴できていたかと言えば疑問。古代ローマの哲学者が言った。『神々人間に一つの舌と二つの耳を授けしは、喋るより余計に聴くためなり』

人は、ただ黙って自分の話を聴いてくれる人がいるだけで救われる事がある。自分が悩みをただ話していても、話しながら整理され、解決の糸口を見つけられるのだ。

※今でも真の拝聴はできてないのが実相です